



沖縄の活況 (3月のごあいさつ)

平成 28 年 3 月 1 日 (火)

3月の沖縄は各地の海開きなど、夏を感じさせます。

世界経済は、リーマンショック以来の低迷に加えて原油の低落、中国経済の不調、欧州難民の危機など、**負の連鎖から脱出できないように見える。**

また日本経済は、2015年10-12期のGDPが前期比△1.4%の成長となっている。企業はデフレ期を通じて現預金を積み上げ、その額は350兆円とも言われているが、**新規の設備投資**は控え目で、**労働分配率**は向上するどころか低下している。原料安のメリットを言うより、**販売不振の傾向**が顕著になりつつあり、先行の暗さを感じさせる。

一方、現下の沖縄経済は、**観光や物流などで活況**を呈している。空港の拡張やモノレールの延長、西海岸の湾岸道路など公共投資も実施中であり、**将来に対する期待**も大きいものがある。

しかし、その活況は国内比較あるいは沖縄の過去比較であり、類似地域の香港、シンガポール、台湾、韓国等との比較の結果は不明である。

そのうえ、**沖縄の分母としての経済基盤**は、他の地域に比較して小さく、経済に与えるインパクトは過大に評価されがちである。そして40年来、相も変わらず沖縄経済の**他者依存の傾向**は変わらない。

今般、沖縄総合事務局が開催する「**地域密着型金融に関するシンポジウム in おきなわ**」において、コーディネーターを務めさせていただくことになった。各界のパネリストに対するテーマは二つに分けて、「**沖縄経済・産業の発展に向けて**」ということと、「**地域金融機関の役割等**」である。

前半は、上記の沖縄経済、産業の活況は本物か、グローバル化できるか、**企業経営者の意識のレベル**は期待に値するか、沖縄の経済、産業の将来はいかにあるべきか、など議論すべきこと、聴かせていただきたいことは多い。

後半の地域金融機関の役割と要望については、単に担保や保証に頼らない融資や**目先のコンサルティング**だけでは不十分である。「**地域密着型金融・リレーションシップバンキング**」も早13年を経過している。**金融機関は視野**を広げなければならない時に来ているのではないだろうか。それは地域経済における**今までとは違った視点と役割**、個別の企業コンサルティングを超えた地域産業レベルの振興への寄与である。このことは、金融機関が地域の頭脳や情報を結集して**地域産業のシンクタンク**となり、企業戦略の策定や提言を行うまでになることが期待されている。